

美濃客家語の副詞"緊"の多義性についての試論

著者	田中 智子
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	20
ページ	139-147
発行年	2018-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000608/

美濃客家語の副詞“緊”の多義性についての試論¹

On the Polysemy of the adverb “gin” in Meinong Hakka: a tentative analysis

田 中 智 子

キーワード：美濃客家話、副詞、緊、事象の複数回性、多義

要 旨

高雄市美濃区で話されている客家語では、副詞“緊”が動詞の前に置かれ、動作や状態が進行中であることを表す。先行研究では、一部の例外を除き、この“緊”を進行や持続を表すアスペクト標識とみなすことが一般的である。本論文では現地調査で収集したデータをもとに、“緊”が表している中心的な意味は「事象の複数回性 (event plurality)」であることを主張する。

1. はじめに

高雄市美濃区で話されている客家語² (以下「美濃客家語と呼ぶ」) は、いわゆる南部四縣話に属する。この言語では、動詞の前に“緊”という語を置き、事象 (動作など) の持続や進行を表すことがある。例：

- (1) (keu42e42) **in42** p^hoi55 o42.
 (犬) 緊 ほえる 語気

「(そのいいおじいさんが土をほってるところで) 犬がほえとった³」

他の方言でも“緊”の同根語が見られ、それらの語は、持続や進行を表すアスペクトの一種と説明されることが多い。つまり、「文法的要素」とみなしているといえる。

ところが、美濃客家語のコンサルタントの中には、上記の例の「**in42** p^hoi55」のようなフレーズは「一生懸命吠えている」という意味だと指摘する人がいる。もし、“緊”が本当に純粋なアスペクト標識なのだとすると、「一生懸命」という語彙的な意味が生じる理由が説明できない。

本稿では、記述言語学的方法を用いて、まず美濃客家語の副詞“緊”のもつ語彙の意味について考察する。その上で次のことを主張する。

- (I) “緊”の中核的な意味は、事象の複数回性である。
- (II) この中核的な意味に、本動詞の語彙の意味や文脈が付け加わり、先行研究が指摘するようなアスペクト的要素や、上記の例で挙げたような「一生懸命」という意味など多

様な解釈が起こりうる。

- (Ⅲ) (Ⅰ) (Ⅱ) のように考えると、「持続／進行のAspect」として解釈した場合に抜け落ちてしまう用例についても説明することができる。

なお、例えば東勢方言では、動詞の後ろの位置に“緊”が現れ、動作が進行中であること、または、動作が持続していることを表す。しかし、本稿で主な対象としている美濃客家語にはこの用法がないため、ここでは扱わない。

2. 先行研究

動詞の前の“緊”について、先行研究は大きく分けて2つの立場がある。一つは、Aspect標識の一つと説明する立場であり、もう一つはAspectとは見なさない立場である。

前者はさらに、次のように分類することができる。

1) 連続や持続を表すAspect標識と考えるもの

例：「連續體」(林立芳 1997: 138)、「持續體」(項夢冰 1997⁴、宋彩仙 2008)、「繼續貌」(頼文英 2015: 309)。なお、項夢冰 1997は、「長時間」「一生懸命(拼命地)」などの意味を持つことも指摘している(項夢冰 1997: 192)。

2) 進行のAspect標識と考えるもの(江敏華 2007)

3) 反復のAspect標識と考えるもの(房子欽 2015: 44)

また、「Aspect」と説明しないものとしては、羅筆錦 1988と遠藤 2010がある。

このうち、羅筆錦 1988は、“緊”が副詞で、「一直(ずっと)」という意味を表すと説明している。(羅筆錦 1988: 179)。また、遠藤 2010は、その意味を「一直」「常」とし、「緊」は標準語の「一直」「常」に相当する副詞であり、これを専用のAspect標識とすることに筆者は躊躇する」と述べ、Aspect標識とは認めない立場を明らかにしている。

本稿は、「緊」の中心的な機能はAspectを表すものではない」という点では遠藤 2010と立場を同じくする。しかし、遠藤 2010では、“緊”の機能については議論の中心ではないため、詳しい分析はなされていない。次の節では、美濃客家語の副詞“緊”の用法を詳しく検討し、この意味を明らかにする。

3. 美濃客家語の副詞“緊”の意味

3. 1 データについて

本稿で使用したデータは2009年から2018年にかけて現在の高雄市美濃区、特に龍肚里で行った調査によって得られたものである。

調査の方法は基本的に対面調査を用いた。調査は日本語または北京語を用いて行った。

本稿のデータを主に提供していただいたのは、龍肚里在住の勤の1950年～1927年生まれの方である。ほとんどの方は仕事や学業の関係で他地域に住んでいたことがあるが、現在は龍肚里

で生活しており、筆者の観察した限りでは日常生活（家族や地域の人との会話）では主に客家語を使用している。

なお、1927年生まれの方に語っていただいた物語も、データの一部に加えた。

コンサルタントリスト

コンサルタント	性別	出生年	職業	出生地	調査時の使用言語
A	男	1927	退職者（元教師）	龍肚	日本語
B	男	1931	退職者（元雑貨店経営）	龍肚	北京語、日本語
C	男	1950	退職後農業	龍肚	北京語
D	男	1967	教師	竹頭背 (美濃区内)	北京語

3. 2 美濃客家語の副詞“緊”の意味

美濃客家語では、“緊”は [gin42] と発音される。しかし、自然な発話では語頭の子音が落ちるという現象がたびたび起り、[in42] と発音されることも多い。

本稿では、事象の複数性という観点から、“緊”の持つ多義性について考察する。

3. 2. 1 頻度の高さを表している場合

“緊”がある出来事の起こる頻度の高さを表している例には次のようなものがある。

- (2) a. ngai11 ts^ho33pu33ngit2 tseu42 e42 ki42ha55to55 mi33nong11.
私 昨日 行く 完了体 何度も 美濃
- b. ngai11 ts^ho33pu33ngit2 **in42** tseu42 mi33nong11.
私 昨日 緊 行く 美濃
- 「私は昨日何度も美濃（の市街地）に行った。」

あるコンサルタントの説明によれば、(2)の表す状況は、「美濃市街に一度行って帰って来たあと、用事を思い出してまた美濃に行き、帰ってきてからまた用事ができて美濃に行った」というニュアンスになり、非常に特殊な状況を表している。したがって、「昨日（一日）」という語が表す短い時間と「緊+動詞」の組み合わせは、あまり適切ではない。もし“緊”を使うならば、次の例3のほうが自然な感じがするとのことである。

- (3) ngai11 a33me33 het5 ian55, an42 to33 ngit2 **kin42** tseu42/hi55 i33ian55.
私 母 入院する そんなに 多い 日 緊 歩く／行く 病院
- 「母が入院したので、何日もの間、何度も病院に（見舞いに）行った」

このような説明は、項夢冰 1997が、“緊”は「長い時間を表す」と述べていることに一致する。

あるコンサルタントは、“緊”は回数を表す名詞と共起しにくいという。

- (4) a. Li42 in33sang33 lien11iuk5 ts^hong55 ng11 t^hiau11 ko33e42.
 李 氏 続けて 歌う 5 曲 歌
 b. ?Li42 in33sang33 kin42 ts^hong55 ng11 t^hiau11 ko33e42.
 李 氏 緊 歌う 5 曲 歌
 「李さんは続けて5曲歌った。」

このコンサルタントによれば、上記の(4)のような意味を表す場合、「連続 lien11siuk5 (続けて)」という言葉であれば使えるが、“緊”を使うと不自然であるそうである。しかし、具体的な数を表す「5」を「koi55 to33 (とてもたくさん)」というフレーズに変えると、自然な文になるとのことである。

- (5) Li42 in33sang33 **kin42** ts^hong55 koi55 to33 t^hiau11 ko33e42.
 李 さん 緊 歌う とても 多くの 曲 歌
 「李さんは続けて何曲も歌った。」

同様に、お参りの時などに、「3回頭を下げる」というのは、「ngam42 ((頭を)下げる) sam11 (三) pai42 (回) t^heu11 (頭)」と言わねばならず、“緊”があると、たとえ「頭を下げる」という行為が繰り返されているとしても、非文になる。しかし、もし具体的な数字がなければ「ngam42 (頭を下げる)」と“緊”が共起することもできる。

- (6) ia33 ke55 heu55ien55ngin11 hi55 to55 mi33 it2 ke55
 これ 関係詞 候補者 行く 至る 毎 一 個
 t^hi55fong33 in42 ngam42 t^heu11.
 場所 緊 (頭を)下げる 頭
 「その候補者はどこに行っても頭を下げ続けた。」

上述の理由はおそらく、“緊”はある現象が限界なく繰り返されることを表しており、一方で、回数すなわち動作量はその状況の限界を表しているために、回数を表す名詞句とは共起しにくいのではないだろうか。

3. 2. 2 「継続」「持続」「進行」を表す場合

3. 2. 2で示したように、ある現象が明らかな限界点を持たずに繰り返されると、その表

す意味は「継続」「持続」「進行」の意味に近づくと考えられる。

(7a)が表しているのは、単に「雨が降る」という状態が実現したことを表している。一方で(7b)は「雨が降る」という状態が繰り返されることを表している。

(7) a. kin11pi33ngit2 lok5 i11 e42.
今日 降る 雨 完了体

「今日雨が降った。」

b. la5 an42 to33 ngit2 kin42 lok5 i11.
この こんなに 多い 日 緊 降る 雨

「このところ、こんなに何日も雨が降っている。」

(8) (例1の再掲)や(9)が表しているのは、「犬が吠える」という状態が繰り返されることである。したがって、この2つの例文が表している意味は「犬が吠えている」または「犬がずっと吠え続けている」ということになる。

(8=1) (keu42e42) in42 p^hoi55 o42.
(犬) 緊 ほえる 語気

「(そのいいおじいさんが土を掘ってるところで)犬がほえとった。」

(9) “van van van, van van van” , in42 p^hoi55 o42.
ワンワンワン、ワンワンワン 緊 吠える よ

「“ワンワンワン、ワンワンワン”と吠え続けていたよ。」(* (8)に続く文)

ところで、先行研究には“緊”を持続アスペクトの標識とみなすものがある(項夢冰 1997等)。そのような立場では、例(7b)や(8)(9)は「持続アスペクト」とみなされるかもしれない。しかし、美濃客家語では下記の(10)のように動詞の後ろに接辞 -nun42 をつけて持続アスペクトを表す。

(10) i11 na33-nun42 tsa33ue42.
彼 持つ-持続 傘

「彼は傘を持っている。」

もし上記の例(10)の -nun42 の代わりに“緊”を用いると(11)のようになり、例えば子どもが、繰り返し傘を持ってあちこち歩いてふざけているように聞こえるとのことである。この場合、「子どもが傘を持っている」状態の持続というよりは、その状態が繰り返されていることを表していると言える。

(11) i11 **in42** na33 tsa33ue42.

彼 緊 持つ 傘

「彼（おそらく子ども）は傘を持っていったり、また持ってきたりを繰り返している」

「緊+動詞句」は、動作の「進行」を表す場合もあるが、美濃客家語には主に動作の進行を表す副詞句がほかにもある。それは、「^{tʰ}e33 ia42 le42（ここで）」または「^{tʰ}e33 ke55 e42（そこで）」である。これらの副詞句は動詞句の前に置かれ、進行の意味を表す。下記の例では、「お母さんは何をしているのか」という質問に対する答えとして、(12a) は自然であるが、(12b) のように“緊”を使うと、母が繰り返し餌をやっているように聞こえ、不自然な文になる。

(12) a. a11me33 (^{tʰ}e33 ke55e42) vi55 ke33e42.

母 ~で そこ 餌をやる 鶏

「母は鶏に餌をやっています。」

b. ?a11me33 **kin42** vi55 ke33e42.

母 緊 餌をやる 鶏

「??母は長い時間何度も鶏に餌をやっています。」

このことから、“緊”の中心的意味は「進行を表す」とは言いにくく、動作が繰り返し反復されることのほうがより中心的な意味であると考えられる。

3. 2. 3 度を越していることを表す場合

“緊”は度を越していることや過剰であることを表すことがある。

(13) Li42 sin33sang33 **kin42** ts^hong55 ngit2bun55 ko33e42.

李 氏 緊 歌う 日本 歌

「李さんは日本の歌ばかりを歌う。(それで他の人は聞き飽きてしまっている)」

(14) **in42** k^hon55 t^hien55sii55, tso55 mak2e55 no33?

緊 見る テレビ する 何 語気助詞

「(子どもを叱って) テレビばかり見て何をやっているの?!」

(15) ki11 **kin42** sia42 sii55.

彼 緊 書く 字

「(子どもを褒めて) あの子は集中して字を書いている」

(13)から(15)は、動作主がある動作を普通よりも集中し、力を入れて行っていることを表す。

動作の内容によって、けなす意味にもなれば(14)、褒める意味にもなる(15)。褒める意味のときには「その人は一生懸命～をしている」という意味になり、一部のコンサルタントや項夢冰1997が言うように、「一生懸命」やっている、という解釈ができるだろう。

このような「程度の高さ」を表す用法は、一見「動作の反復」や「頻度の高さ」を表す意味とは関係がないように見えるが、両者ははっきりと区別できない場合も実際にはある。

例えば、下記の(16)であるが、2つの意味が考えられる。1つは「今雨が降っている」ということで、もう一つは「雨が降るとい状況が繰り返される→雨の降る量が大量になる→大雨」が降っているということである。つまり、頻度の高さはその事象（ここでは「(雨が)降る」)の量が多いことに結びつくと考えられる。

(16) lo42poi55 **kin42** lok5 i11, oi55 loi11hi55 na33 tsa33ue42.

外 緊 降る 雨 ～したい 出かける もつ 傘

「外は今雨が降っている／大雨が降っている、出かけるなら傘を持っていきなさい。」

この文を提供したコンサルタントは、日本語で「一生懸命に雨が降る」と説明した。日本語としては非文であるが、その動作の量が多いこと、程度が高いことを言おうとしていると考えれば、納得がいく。

さらに次のような例もある。コンサルタントの意見によると、下記の文も二通りの解釈が可能であるようだ。

(17) i11 **kin42** se55 t^heu11na11mo33.

その人 緊 洗う 頭髪

解釈①「その人は一心不乱に(周りの人には構わず)髪を洗っている(程度の高さ)」

解釈②「その人はよく髪を洗っている(頻度が高い)」

3. 3 日本語の「よく(yoku)」と「しきりに(shikirini)」

3. 2. 3は頻度と動作の程度量が結びつくことについて述べた。このことは客家語に限ったことではない。日本語の副詞でも、同じ副詞が状態の頻度の高さと動作の様態(程度量)の両方を表すことがある。

ここでは、「よく」「しきりに」を例に挙げる⁵。

(18) よく、食べたわねえ、美奈子も (仁田 2002:160)

(19) よく調べろよ (仁田 2002:161)

(20) 自分はよく怪我のことを考えた (仁田 2002:268)

仁田 2002の説明によると、「よく」は頻度の副詞として用いられる。しかし、用法が広く、例18では「{ズイブン／タクサン} 食べた」のような程度量的な限定を表し、(19)では、「{十分／シッカリ} 調べろ」のように、量・あり様の限定を表している(仁田 2002:161)。さらに、(20)では頻度を表しているが、「事態が高頻度に繰り返され反復することを表している」(仁田 2002:268)。

次に、同じく頻度の副詞である「シキリ {ニ／ト}」が、様態を表す副詞に近づいているという仁田の指摘を見てみる。

(21) ユリは最近、しきりに胃が変だというんでね

(22) 拌み屋がしきりにお経を唱えている

仁田 2002の解釈では、(21)は事態(=ユリが胃が変だと言うこと)の繰り返しや反復が明白である。(22)は事態(=拌み屋が経を唱えること)が何度も繰り返されることを示しているとも言えるし、動作(=経を唱える)の繰り返しを表しているとも言える。このように量性や多回性に関わるのは様態の副詞であり、「シキリ {ニ／ト}」は、頻度の副詞としての性格をもちながら、同時に、様態の副詞に近づいていると仁田は主張する(仁田 2002:275)。

4. まとめ

本論文は、現地調査で得られたデータに基づき、美濃客家語に見られる副詞“緊”の意味と用法について初歩的な分析を行った。そして、この副詞“緊”は、「事象の複数回性(event plurality)」を表していることを示した。この中心的な意味に文中の動詞句の意味や文脈による意味が加わり、いろいろな意味が生じると考えられる。

註

- 1 本稿は、第13回客家語国際学術検討会において発表した内容を、その際のコメントの一部を踏まえて加筆修正したものである。貴重なご意見をいただいた江敏華先生をはじめとする出席者の先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。今回時間の都合で修正に反映できなかったご意見については、今後の研究で引き続き検討したい。
- 2 この言語の音素目録は下記の通りである。
子音／ p, p^h, t, t^h, k, k^h; ts, ts^h, te, te^h; m, n, ng; l; f, s, ɕ, h, v
母音／ a, o, e, i, ii, u
声調／ 33, 11, 42, 55, 2, 51
- 3 コンサルタントの説明をそのまま書いた。
- 4 項夢冰 1997は、動詞の前の“緊”がいくつかの用法を持つことを指摘し、アスペクト標識としての用法はその一つであると考える。
- 5 これらの副詞が動作の「頻度の高さ」と「程度の高さ」の両方を現しうることは、野島本泰氏の私信による。野島氏はまた、「しきり(に)」と「ふりしきる」の「-しきる」が起源を同じくすることに

も着目した。客家語の副詞の緊と接尾辞の緊が同じ起源に由来するのだとすれば、日本語の「しきり(に)」や「-しきる」がたどった文法化のメカニズムは緊の歴史を考察する上で参考になる可能性を指摘した。

参考文献

〈日本語〉

遠藤雅裕 2010. 「台湾海陸客家語のアスペクト体系」, 『現代中國文化の興亡』: 25-63頁。東京: 中央大学出版部。

仁田義雄 2002. 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』。東京: くろしお出版。

〈中国語〉

房子欽 2015. 『台湾客家語動後體標記語法化研究』, 博士学位論文, 新竹: 國立新竹教育大學。

江敏華 2007. 『客語體貌系統研究』。行政院客家委員會獎助客家學術研究計畫。

賴文英 2015. 『臺灣客語語法導論』, 台北: 國立臺灣大學出版中心。

林立芳 1997. 『梅縣方言語言論稿』。北京: 中華工商聯合出版社。

羅肇錦 1988. 『客語語法』, 台北: 學生書局。

宋彩仙 2008. 『客家話體標記的研究』, 碩士學位論文, 桃園: 國立中央大學。

項夢冰 1997. 『連城客家話語法研究』。北京: 語文出版社。

